



Title	1. はじめに
Author(s)	松本, 秀人; Matsumoto, Hideto
Description	第I部: 本論: 観光と図書館の融合について. 第1章
Relation	観光と図書館の融合 = The fusion of tourism and libraries
Citation	CATS 叢書, 5, 3-7
Issue Date	2010-07-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43217">https://hdl.handle.net/2115/43217</a>
Rights	© 2010 松本秀人
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS05_002.pdf



# 本論 : 観光と図書館の融合について

## 第1章 はじめに

### 1 研究の目的

本研究は、観光と図書館の融合について、様々な角度から、その可能性などの考察を行うこと  
によって、こんにちの観光および図書館がそれぞれ持っている課題の解決に、観光と図書館の融  
合がはたす役割を示すことを目的とした。そしてこれにより、観光や図書館の関係者をはじめ、地  
域住民や行政機関などに、観光の創出、図書館運営のあり方、まちづくりの実践活動について、  
新たな手がかりを提供する。

また、観光と図書館の融合を具体的に考察した結果をふまえて、図書館が、観光者と地域とを  
結ぶコミュニケーションの媒介役として機能しうることを示し、これについて「観光者と地域とのコミ  
ュニケーションモデル」を試案として提示した。

さらに、観光と図書館の融合によって、観光、図書館、地域それぞれに新たな価値がもたらさ  
れることも示した。

### 2 研究の背景と分析の枠組み

戦後しばらくの間主流であった「団体旅行型観光」や「物見遊山型観光」は、日本人の価値観  
の多様化や家族構成の変化などの要因によって行き詰まりをみせている。しかし、地域間格差の  
拡大や一次産業の衰退など、地方にとって厳しい状況が続いているため、これまでによくみられ  
た「地域外から観光だけを目的として資本を投入する」という手法では、効果的あるいは持続的な  
観光振興が成り立たなくなっている。

こうした状況のなかで、新たな観光のあり方が求められており、こんにちの観光の主な課題とし  
て、①地域主導による観光振興、②観光の多様化・高度化への対応、の2点をあげることができ  
る。これらの課題に対しては様々な試みがなされているが、「着地型観光」の発想など、地域が観  
光サービスを主体的に創出しようという動きがみられることが特徴のひとつとしてあげられる。観光  
は地域住民以外にサービスを提供する行為であるが、地域でサービスが消費されるという点にお  
いて、地域自身の問題として考えられるようになってきたといえる。

このように、これまで国や地域外に解決を委ねてきた課題に対して、「地域によって、地域という

場所で解決されるべきである」という意識の転換がみられることは観光だけに限らない。例えば、教育や福祉など地域住民に直接サービスを提供する分野でも、改めてそれぞれの施設や制度などについて必要性や重要性が見直されており、こうした動きのひとつに地域の図書館をあげることができる。全国の自治体の約73%(2007年統計)には社会教育施設として「公共図書館」が設置されており、生涯学習への関心の高まりや高齢化によるシルバー世代の増加などによって、図書館の利用は登録者数でも貸出冊数でも増加傾向にある。そこで、本研究ではこの公共図書館に着目した。なぜなら、公共図書館は地域によって運営され、地域の情報拠点であり、多様な資料を所蔵しているなどにおいて、前述した観光の主要課題に対応しうる特徴を持っていると考えられるからである。

しかし、こんにちの日本の公共図書館も、地方財政の逼迫化やインターネットの普及などの要因によって大きな転換期を迎えており、①新たなサービスをどう展開するか、②地域にどのように貢献するか、が主な課題となっている。そこで、「新たなサービス＝観光者へのサービス」、「地域貢献＝地域情報の発信や観光振興を通して地域に貢献」という発想を導入してみると、図書館の課題に対して、観光を意識した活動を図書館が行うことは対応策のひとつとして考えられるのである。

このように、観光の側からも図書館の側からも互いに着目する理由があるように考えられることから、「観光と図書館が融合することによって、双方にメリットがもたらされるのではないか」という仮説を立てることができる。そこで本研究では、この仮説を出発点として、図書館の特性と観光との関連性や、図書館の様々な要素が具体的にどのような効果を持つかなど、様々な観点から両者の融合の可能性を考察した。一般的に「“観光”とは名所を見物したり温泉に入ったりすること」、他方「“図書館”は本を読んだり借りたりする場所」というイメージが強いとみられるが、こんにちでは、そのようなとらえ方では収まりきらない多様な観光現象、多彩な図書館の活動がみられるようになってきており、本研究でも幅広い視野に立って両者の融合を考察した。

一見すると、行為としての「観光」と、場所としての「図書館」の融合を考察することは無謀なようにも思える。しかし、本研究では、図書館をたんなる場所としてではなく、サービスを提供する主体としてとらえている。図書館は書店のように本(モノ)を売っているのではなく、本を貸与したり読書の場を与えたり資料を保存・整理するといったサービスを提供している。観光も地域の資源を直接販売するのではなく、体験や鑑賞というサービスを提供しており、両者は「サービスの提供主体」として共通の特徴を持つのである。

そもそも観光において、様々な要素との融合はよくみられる現象であり、それによって新たな観

光形態が出現したり、これまで観光資源と考えられていなかった事物が観光対象になったり、交流や経済効果がもたらされたりしている<sup>(1)</sup>。本研究における「融合」という表現は、わかりやすくいえば、観光と図書館が様々な点で連携し合うこと、直接的あるいは間接的に利活用すること、まちづくり<sup>(2)</sup>を協働して推進すること、などを意味しているが、「融合」という表現にはたんなる連携や利活用以上の意味をも含んでいる。それは「融合によって新たな価値がもたらされる」という点である。観光が様々な要素と融合した際、多くの場合において、これまでになかった利用価値や経験価値が創出されている<sup>(3)</sup>。従って、観光と図書館についても、両者の連携にとどまらず、そこに新たな価値が生み出される可能性があるとすれば、それは「融合」と表現するのがふさわしいと考えて、この表現を用いた。また「新たな価値」については第5章で詳しく述べる。このような問題意識に立って（「連携」や「活用」ではなく）「融合」に着目することによって、本研究の独自性をいっそう高めることができると考える。

なお、観光と図書館との融合は、観光における様々な要素との融合例のひとつに過ぎず、本研究でこれを特別視する意図はなく、他の融合例との優劣を比較する意図もない。また、観光と図書館が融合することによって双方の課題がすべて解決すると主張するものでもない。とはいえ、これまで観光と図書館の融合が唱導されたことはなく、具体的にどのような可能性があるかについても考察されてこなかった。従って、そのような空白を本研究が埋めることによって、新たな問題提起を行うことには大きな意義があると考ええる。

### 3 研究の対象と方法

研究対象は日本における観光および日本の公共図書館とした。日本国内と海外とでは、観光および図書館をとりまく環境それぞれに相違があり、場所を特定せずに論じることには無理があると考えられるからである。また図書館については、日本の図書館界において、a)公共図書館、b)学校図書館、c)大学図書館、d)専門図書館、e)その他、に分類されるのが一般的であるが、それぞれが持つ機能や対象とする利用者などが異なるため、すべてを対象にすると、考察にあたって検討すべき要素が非常に多岐に渡る。そこで本研究では、図書館法に基づいて設立された図書館のうち地方公共団体が設置した図書館を対象とした<sup>(4)</sup>。

研究方法は以下などによった。

①図書館、観光、およびそれに関連する領域の文献調査。（～2009年9月頃まで）

②参考事例の収集は、各図書館のホームページ（以下、「HP」と略す）のチェック、雑誌・新聞

記事のチェック、図書館系メールマガジンのチェックなどによって行った。電話や訪問などで事実関係の確認や追加取材なども行った。(期間は概ね2008年1月～2009年9月頃まで)

③実態調査および意見収集のため、図書館へアンケートを行った。(対象＝約200館、期間＝2009年5～6月。詳細は付属資料2を参照。今後、本稿で「図書館アンケート」といった場合、このアンケートのことを指す)

④図書館での実地研修(札幌市立中央図書館、2009年3月17～21日)および各図書館での実態観察(札幌市、石狩市、恵庭市、北広島市などで図書館員や利用者の行動観察)。

#### 4 論文の構成

第1章では研究の目的、研究の背景と分析の枠組み、および研究対象と研究方法を述べた。

第2章では日本における観光と図書館について、戦後の略史をまとめつつ現状と課題をそれぞれ述べたうえで、両者が融合することによって課題が解決する可能性があることを仮説として提示した。そして、具体的な考察を進める前に、図書館の特性からみた観光との関連性、観光と図書館の社会対応にみられる類似性の2点について予備的な考察を行った。

第3章では、図書館の諸要素からみた観光との融合の可能性について、参考となる事例をあげて具体的な考察を行い、またそれらの整理と分類を試みた。

第4章では、第3章で行った具体的な考察の中にみられるコミュニケーションの部分に注目し、「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として示した。これにより観光と図書館の融合において、観光者と地域とのコミュニケーションの媒介役として図書館がはたすと考えられる役割を強調し、図書館が「よそ者」と交流し、地域外の声を聴く場として機能しうる可能性を述べた。

第5章では全体のまとめを述べるとともに、融合によってもたらされる新たな価値を説明した。また、融合にあたって留意すべき点や今後の課題についてもふれた。

#### 【補注】

(1) 例えば、日本エコツーリズム協会は「地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である」とエコツーリズムを説明している。(日本エコツーリズム協会HPより

<http://www.ecotourism.gr.jp/what/> downloaded at 2009.12.15) 他にも、労働と観光の融合による「ボランティアツーリズム」、農業と観光の融合による「アグリツーリズム」など様々な

例がある。また「観光まちづくり」という発想も観光とまちづくりの融合であるといえる。

- (2) 本研究では「まちづくり」を、西村(2009, p.10)のいう「地域社会を基盤とした地域環境の維持・向上運動」としてとらえる。
- (3) 例えば、アートと里山環境と観光の融合によるイベント「越後妻有アートのトリエンナーレ2009」(2009年7月26日-9月13日)では、「アートの表現空間としての里山」という新たな価値が創出されていると考えられる。
- (4) 図書館法に基づく図書館のうち地方公共団体が設置する図書館を、図書館法では「公立図書館」と称しているが、ほぼこれと同意で「公共図書館」という表現が一般的によく使われているので、本稿では「公共図書館」を「公立図書館」の意味で使用している。なお、参考事例の紹介などで公共図書館以外について述べた場合もある。また、公共図書館を研究対象にしたことに伴い、本研究で「地域」という用語は、その公共図書館を設置している自治体のことを基本的に想定して使用している。すなわち市区町村立図書館では市区町村が、都道府県立図書館では都道府県が「地域」となる。ただし、「地域文化」など自治体を単位にして区切ることが難しい概念については、「当該自治体およびその周辺」というイメージで使用している場合もある。